

博士学位論文審査要旨

2018年1月16日

論文題目： 南方熊楠・土宜法龍の研究
——交わりの視点から読む、近代日本の知識人の主体形成——

学位申請者： 小田 龍哉

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 小林 丈広

副査： 文学研究科 教授 西岡 直樹

副査： 高野山大学文学部 教授 奥山 直司

要旨：

本研究は、南方熊楠（1867～1941）と土宜法龍（1845～1923）との間で交わされた往復書簡を中心に、彼らの思想を両者の交わりの視点から読み解こうとするものである。

具体的には、1870年代に展開した後七日御修法再興運動、「事の学」の思想的系譜と井上円了の「妖怪学」に対する批判、雑誌に寄稿した記事からうかがえる真言密教観などを分析することを通じて、南方と土宜の思想と行動の特質を明らかにする。その上で、南方と土宜が交わした往復書簡を、『維摩経』との関係を中心に読み解き、両者の問題意識が世俗の中でいかに超越してあるかという点にあったことを指摘する。

筆者によれば、南方と土宜の往復書簡は、1893年から始まり、土宜の死の前年1923年まで続くが、本研究では、そのうち1893年から1904年までの書簡に着目し、とくに、南方が欧米から帰国し、那智の山中に居を定めた1902年から1904年に土宜から送られてきた書簡を解読することで両者の関係の解明を試みた。この時期は、近年関心が高まっている南方の生涯の中でも、その思想を探る手がかりとして注目されている「南方曼荼羅」が土宜宛の書簡の中に描かれた時期にあたっており、本研究が、今後の南方研究だけでなく、宗教思想史や近代仏教史、民俗学などにも新しい視座を提供するものと思われる。本研究においては、史料に比べて筆者の分析視角が過剰にすぎる傾向も見られるが、書簡の解読を通じて多くの興味深い指摘をおこなっており、今後さらに解読を進めることで、両者の実像により迫ることが期待できる。

よって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2018年1月16日

論文題目： 南方熊楠・土宜法龍の研究
——交わりの視点から読む、近代日本の知識人の主体形成——

学位申請者： 小田 龍哉

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 小林 丈広

副査： 文学研究科 教授 西岡 直樹

副査： 高野山大学文学部 教授 奥山 直司

要 旨：

上記審査委員3名は、2018年1月15日、午後1時30分から約3時間にわたり、同志社大学徳照館2階の第一共同利用室において、学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、審査員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の問題についても、適切かつ詳細な応答をおこなった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

口頭試問にひきつづきおこなわれた語学（英語）試験においても、十分な語学力を備えていることが確認された。

よって、本論文に関する総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 南方熊楠・土宜法龍の研究
——交わりの視点から読む、近代日本の知識人の主体形成——

氏名： 小田 龍哉

要旨：

本研究は、南方熊楠（1867—1941）と土宜法龍（1845—1923）とのあいだで交わされた往復書簡を軸に、彼らの思想を両者の交わりの視点から読み解こうとするものである。

交わりの視点とはなにか。それは、ひとつには書簡の当事者たちが邂逅し、書簡のやりとりを開始するにいたるまでの知的ないとなみを、二本の軌跡として描き出すことである。南方は植物学者・民俗学者などとして知られた在野の知識人、土宜は明治・大正期の真言宗の僧侶だったので、二本の軌跡はいずれも思想史・宗教史的な色彩の強いものとなる。また、交わりというからには、二本の線が交わったのち、離れていく様子も追わなくてはならない。

もうひとつは、書簡の往復状況という交わりである。南方・土宜往復書簡は、両者が出会った翌月の1893年11月から、土宜の死の前年にあたる1923年の10月まで、およそ30年間にわたって（それぞれ5年ほどの二度の空白期をはずして）つづけられた。現在までに発見されている書簡の総数は計152通。その内訳は、土宜宛南方書簡（以下「南方書簡」）が73通、南方宛土宜書簡（以下「土宜書簡」）が79通である。

本研究では、1893年から1904年までの期間に認められたことが判明している未翻刻の土宜書簡19通を翻刻し、その全文を「資料編」として巻末に収録する。そのことで、これまで偏りのあった両者の書簡の翻刻状況が是正され、より公平な視点で書簡の往復状況を検討することが可能になった。

特に重要なのは、1902年1月から1904年10月までの土宜書簡14通が、今回あらたに翻刻されたことである。この時期は、足かけ14年におよぶアメリカ・イギリスでの生活から帰国した南方が、故郷の和歌山で1年あまりをすごしたのち那智の山中に居を定め、採集と思索とに明け暮れた、「那智隠栖期」に重なる。南方の認識論のモデルをあらわしたものとして鶴見和子によって高く評価され、以降、南方を読む者たちの興味を惹きつづけている「南方曼陀羅」と呼ばれる複雑な線描図も、ちょうどこの時期、1903年8月17日の土宜宛書簡のなかで描かれたものだ。

ところが、これまで同時期の土宜書簡は、計19通存在が確認されているうちの、わずか3通しか翻刻されていなかった。だが今回の作業によって一挙にその5倍ちかくの数の書簡が活字化され、南方の思索の高まりを往復書簡の片側からだけでなく、交わりの視点から読み解くことが可能となった。そのことの意義は大きい。

さて、以上のような方法で南方・土宜往復書簡を読むことをつうじて、本研究では、近代日本の知識人における言葉と主体形成との関係について考察する。本研究では、われわれ一人ひとりの主体は日々の生活の局面で各人が言葉を多様に「語りわける」ことをつうじて形成される、という見方をとる。たとえばそれが学者や宗教者であれば、「真理」や「さとり」といった、その追求する境地をあらわす概念をどう語るか（あるいは語らないか）によって、彼らの主体は形作られることになる。そして、往復書簡の「交わり」を詳細に分析すると、南方や土宜にとっての問題関心も、まさしくその点にあったことが浮かびあがってくる。

彼らが熱心に議論を交わした比較宗教論や仏教改革論は、明治という時代において仏教がどの

ように真理を語り、社会とかかわっていくべきか、を問うものであった。また、とりわけ南方にとっては、かならずしも近代社会の機制に十分には適応できない（わたし）という主体が、世俗のなかでどのように他者と適度な「距離」をたもちつつ語ることができるか、が重要な課題だった。

一方は在野の学者、他方は密教者という南方、土宜の両者はともに、明治の学問状況のなかでは傍流に配される知識人だった。しかし、傍流であるがゆえに、近代日本思想のメインストリームとは温度差があった。南方と土宜との思想の共通点は、現象と実在とを一元的に「相即」させる「現象即実在論」の系譜には属さず、むしろその「一」性を「多」へと解体してしまうような傾向を持っていたことだった。

本研究ではまず、明治初期の日本における「語られぬ」宗教論の系譜に注目する。第一章では、真言宗の朝廷儀礼・後七日御修法の再興運動を検討するなかで、J・S・ミル（1806—1873）の宗教論『宗教三論』（1874年）の第三論文「有神論」が、福澤諭吉（1835—1901）がかかわった日本語版翻訳の中止によって、文字どおり「語られなかった」ことを見出す。同論文で説かれていたのは、完全なる「神」や「真理」は存在しない（half-truths）という前提のもと、愛する死者との応答によって自身を律し、人生をより価値あるものへと高めていこうとする、「希望の神学」と呼ばれる主体形成論であった。日本語訳出版中止の背景には、そうした思いが声高に語られることを潔しとしない、福澤の死者への態度との距離があった。本研究では、そうしたミルの宗教論を、南方・土宜往復書簡の検討をつうじて主体論を議論するさいの、重要な参照点に据える。

第二章から第五章では、南方と土宜それぞれの思想を検討し、彼らが語った言葉の軌跡に見え隠れする「多」性を露わにしていく。第二章では南方が往復書簡の初期に着想した彼の学問の構想「事の学」を、朱子学の「理」という一元的な宇宙原理では語ることが困難な「事」に注目した、江戸—明治期の日本思想史の系譜に位置づける。第三章では、南方の「事の学」と井上円了（1858—1919）の「妖怪学」の比較をおこない、「現象即実在論」の嚆矢ともいべき井上の思想と南方の思想との差異と共通点とをあきらかにする。

第四章と第五章では、土宜の思想の軌跡を描く。第四章では、真言密教の思想が、儀礼や論義の場で「事」を多様に分節化し、さらにそれを「即事而真」として現実の世界に応用しようとする「事の教」であったことを導く。また、井上が大きな影響を受けた天台宗の教えが「一」との相即を説くものだったのに対し、真言宗の教えは即の「多」性を説くものであることを考察する。第五章では、これまで顧みられることのなかった土宜の雑誌掲載論考や仏教演説に注目し、読み手を攪乱し、逃げつづける彼の語りかどのように主体形成にかかわっていたのか検討する。

第六章では、第二章から第五章までの考察で描いた南方と土宜の思想の軌跡が、いよいよ往復書簡上で交わることとなる。本研究ではさらにそこに『維摩経』という補助線を引き、両者のやりとりを読み解いていく。そのように読むことによって、彼らの問題意識が、世俗のなかでいかに超越してあるか、というまさに同経で説かれるテーマを議論したものであったことがあきらかになる。

真理をどう生きるか、を重要視するという点では、南方と土宜との意見ははじめから一致していた。食いちがっていたのは、言葉に対する彼らの主体の立てかたである。土宜の「事の教」は、主体を「宗教」という「世俗」に対する特権的な位置に置き、たしかな足場から語ることで現実の社会をより良く変えていこうとする教えだった。それに対して南方の「事の学」は、あくまで主体を世俗のただなかに置き、そこで語ることで真理を生きようとする学問であった。しかし、その議論のなかで描かれたいわゆる「南方曼陀羅」の線描図は、「生きるための」思想としては未完のものだった。やがて南方は「一」と「多」とのダブルバインドに引き裂かれ、きわめて不安定な精神状態のなか、那智の山中から下りることを決意する。

最後に終章では、「南方曼陀羅」以降に南方が確立した語りの文体を検討し、現代を生きるわ

れわれにとっての、他者との適度な「距離」の関係について考察する。南方のユニークな主体形成のありかたには「戒律」と「恋」とが大きく影響していた。それは、ミルの「希望の神学」ともつうじあう、愛する死者と自身との関係を異端として聖化し、メインストリームの言説と「語りわける」ことで他者との適度な「距離」をたもつという、きわめてアクチュアルな主体化論であった。